フリガナ	クラタ　ケンゴ		学部　学科など	汽水域研究センター
氏　　名	**倉田　健悟**		職　　名	准教授
			講　座など	
専門分野	・海洋生態学 ・応用生態工学	その特徴	主に沿岸の海洋生態系における生物と環境の関係を解明し、今後、河川から海までの流域を持続的に利用するためにはどのようにしたら良いか提案する研究分野です。	
研究テーマ	**(1)『汽水域生態系における面的な物質移動の解明』** **(2)『港湾等の閉鎖性水域における生態系を健全にするための構造物の開発』** **(3)『河口域塩性湿地に生息するカワザンショウガイ科２種の生態学的研究』**	その特徴	(1) 中海や宍道湖のような汽水域に陸からの影響はどの程度あるのか、「岸辺」における物質移動を明らかにします。 (2) 内湾や港のような閉鎖的な海域に構造物を設置する場合、どのような形状が生物に適しているか研究します。 (3) ヨシ湿地などの汽水域に特徴的な底生動物の生態を調べることで、ヨシ原の再生事業の意味を考えます。	
可能な共同研究・地域連携	**・テーマ・項目：**汽水域生態系の保全および修復技術の開発 (関係する行政機関、環境調査会社等) **・要望事項：**受託研究、共同研究、研究員の派遣等 (技術の具体化、教育の普及)			
可能な科学技術相談	**・項目：** ・汽水域に生息する底生生物の定量的な採集方法 ・生物群集の統計的解析 ・安定同位体比を利用した食物網の解析			
キーワード	汽水域，物質循環，生物間相互作用，港湾，閉鎖性水域，堆積物，個体群動態，生活史，河口域			

＊　研究のポイント

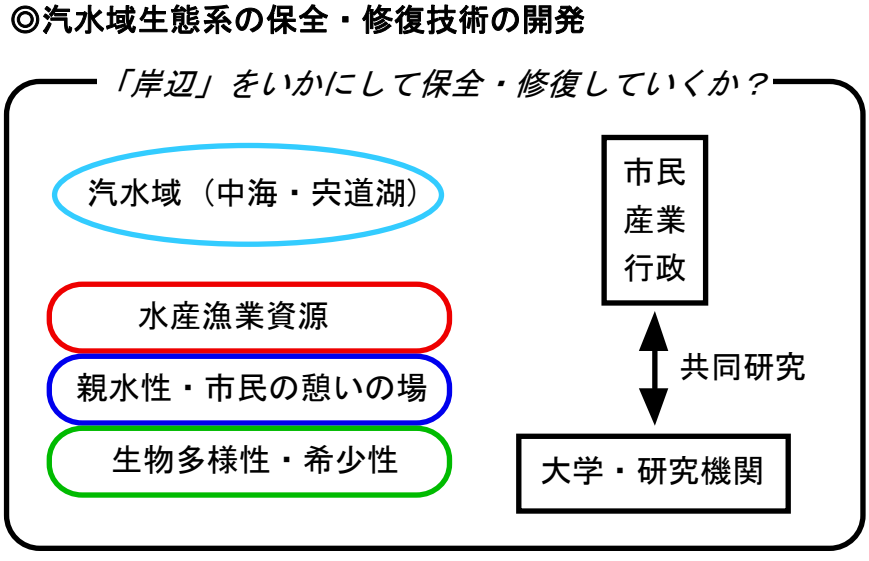
研究の概要：

中海の干拓事業と宍道湖の淡水化事業の中止が決まり、今後、この二つの汽水湖を含む生態系をどのような場所として未来に残すかという視点が一層、重要になってきます。特に、湖心と違い陸から容易にアクセスできる岸辺は、(1) シジミなどの水産資源の漁場、(2) 市民が湖に触れる高い親水性、(3) 希少な生物種と高い生物多様性の保全、の 3 つのポイントを両立させる施策が必要です。しかしながら、岸辺における生物群集の担う物質の流れや、護岸などの構造物の設置が生物に及ぼす影響についてのデータは多くありません。これらの研究テーマについて、市民、産業、行政、大学の研究機関が協力して解決する取り組みを行います。

成果の展望：

1. 地域の生態系保全に関する組織や人のネットワーク（地域の市民に貢献）
2. 岸辺の修復技術、特に新しい人工構造物の新規開発（民間企業に貢献）
3. 汽水域生態系の保全のモデルケースとして世界に発信（学術研究に貢献）

＊いずれも中海と宍道湖を含む汽水域の持続的な利用に対して有用な成果となると考えられます。

アピール点：

中海や宍道湖の汽水域生態系の保全と修復には、科学的なデータによる議論が不可欠です。長期的な生態系の変化を考慮して汽水域の沿岸をどのような場所にするか提案できる研究が求められています。社会的な要素を多分に含むため、大学の研究機関のみならず、市民、産業、行政の方との協同作業が必要です。